

霊長類では初検出

ニール(PCB)とその他の代謝物の水酸化PCBを検出した。霊長類の胎児では初の報告例。14日から京都市



野見山桂
愛媛大講師

愛媛大沿岸環境科学研究センターの野見山桂講師らのグループが、ニホンザルの胎児からポリ塩化ビフェ

ニホンザル胎児からPCB

発達障害の研究に 愛媛大のグループ

で始まる日本環境化学会環境化学討論会で発表する。ヒトでは発達障害と胎児期に幼児期のPCB摂取の関連が指摘されており、こうした研究の基礎資料となることが期待される。

PCBは環境ホルモンの一種で、環境中で分解されにくく体内に蓄積されやすい。グループは一昨年と昨年、四国で有害動物として駆除されたニホンザルのうち妊娠中7個体の提供を受け、胎盤▽羊水▽胎児の脳と肝臓―を調査。試料全てからPCBと体内に取り込まれてできる水酸化PCBを検出した。

特に中期・後期胎児の肝臓から検出されたPCB総量が380〜660ピコ(ピコは1兆分の1)と高い値を示し、水酸化PCBも高かった。グループの野見山講師は「ヒトはニホンザルよりPCBの蓄積量が多く、胎児にもより多く取り込まれると類推される」と分析。脳神経系の発達に影響する可能性を指摘している。

【松倉展人】